

●技術・職業教育

教 研 改 善 へ 向 け て ― 共 同 研 究 者 不 同 提 案

モノづくり学習を大切に

〔名古屋大学名誉教授 佐々木 享チカヒ〕

1 モノづくりを大切に

道具を用い、モノをつくることはヒトを人間たらしめた人類史に知られた根本的営為である。このことは、共同して道具や機械を操作して対象物に働きかけるモノづくりや動植物の飼育栽培を学習することが、人の成長・発達の過程で不可欠な役割を果たすことを示唆している。授業時間数が縮小されたなどの厳しい状況の中で、こうした観点に立って工夫をこらした実践報告が多数提出されているのは嬉しいことである。

中でも、学習指導要領ではなくなったに等しい状態におかれているにもか

かわらず、栽培学習の実践が毎年数件は報告されてきた。そこには、農山村の学校に限られず、都会地の学校でのバケツ栽培などさまざまな工夫をこらした実践が含まれている。こうした実践にとりくむ教員たちが例外なく元気であることは特記しておかなくてはならない。

2 職場体験学習・インターンシップの課題を明確に

近年、中学校では職場体験学習が、高校ではインターンシップのとりくみが広がっている。「総合的な学習の時間」であったり、特別活動の一環とさ

れたり、高校では「産業社会と人間」の中のとりにくみであったりするなど、これらのとりにくみの教育課程上の位置づけは不明確な場合が多い。とくに、たんに上から指示されたからという受け身のとりにくみには、位置づけの不明確さが目立つ。

職場体験学習やインターンシップのとりにくみの教育課程上の位置づけは、教員集団により工夫されるべき課題だが、技術教育や職業教育にたずさわる教員としては、今日の子どもたちに失われている実社会での労働体験の場であることに留意し、技術教育や職業教育の観点から積極的に参画すべき課題であるように思われる。



3 現場教員を元気づける

今次の学習指導要領改定により中学校の技術・家庭科の週当たり授業時間が大幅に縮小され、高校職業学科を再編縮小する動きも全国的に広まっている。技術科や高校職業学科の教員たちにはそうした中で元気を失っている者も少なくないので、この分科会に集う教員たちを元気づけることは分科会運営にたずさわる司会者・共同研究者が最も留意すべき課題だと考えてきた。それはすべての参会者も互いに配慮すべきことであろう。

4 この分科会の名称（構成）の沿革にふれて

「技術・職業教育」分科会の名称は、その先駆とみられる分科会の時期を含めると多少変遷し、第二十二次集会（一九七三年・和歌山）から、従来の

「技術教育」分科会を「技術・職業教育」分科会と改称した。これより数年前から高校職業学科からのリポートが急増し、その中には工業、農業などと違つて技術教育とはいえない商業教育に関するものも含まれていたもので、この分科会は高校職業教育の諸問題をも扱うことを明確にしたわけである。

第四十次集会（一九九一年・東京）と第四十一次集会（一九九二年・千葉）では、従来の家庭科分科会と統合して「技術・家庭教育」分科会とされ、同時に「職業教育」という分科会が別に開設された。しかしこの分科会構成は、技術科の教員、家庭科の教員を含む多くの参加者から甚だ不評で、程なく旧に復した。

現在のこの分科会の名称（構成）は、今日の情勢に照らしてなお積極的な意義をもっているように思われる。